鉄人たちの夏

長良川国際トライアスロン　四半世紀

▶2◀

ゴールの達成感 魅力

水野達雄さん（74）　最高齢エントリー

「今回限りでやめよう」―。トライアスロン歴二十年余りの水野達雄さん（七四）＝愛知県犬山市＝はレース中、いつも心の中でそう思う。でもゴールに到達すると、言葉で表せない達成感に包まれる。

「あの瞬間があるから続けられる」

愛媛県生まれ。父は漁師だった。生家の前に広がる大海原。幼いころから泳ぎは得意で、野球が好きなスポーツ少年だった。

三十代で本格的にマラソンを始め、ホノルルマラソンは五度出場。航空自衛隊小松基地（石川県）に所属していたとき、後輩の勧めで出合ったトライアスロン。「奥が深く、面白い競技」と感じた。

過去、トライアスロンに約二十回、フルマラソンには約十五回出場し、いずれも完走。「途中で『もうだめ』と思ったら終わり。『歩いてでもゴールするぞ』という強い気持ちが必要」と言う。

「今は毎日が日曜日」と笑うが、一七三㌢、六一㌔の均整の取れた体は節制のたまもの。週六日、トレーニングに励む。千～千五百㍍泳ぎ、十㌔ほど走り、ジムでバイクをこぐ。炎天下でも走る。

自宅には、さまざまな大会で獲得したトロフィーやメダル、盾、賞状が並ぶ。でも、順位やタイムにこだわりはない。「速い、遅いはあるけど、スポーツは楽しむことが大切だから」と話す。

退官後、登山を始めた。三千㍍級の山脈を何度も踏破した。だが年齢とともに、衰えを感じることがある。「トライアスロンは過酷なレース。そろそろ潮時かな」。それでも続けるのは「メジャーな競技になってほしい」と願うから。レースに挑む中高年選手にとって、水野さんは希望の星でもある。

長良川国際は昨年、初めて出場。大雨の中、ボランティアの高校生らの温かさに触れた。「サポートの良い大会は特に楽しい。長良川は雰囲気が良い。だから人気があるのでしょう」と話す。

今回はエントリーを済ませたが、体調はいまひとつ。当日まで体と相談しながら出場を目指す。

「多くの仲間と会えるのも楽しみ」。目は輝いていた。（松瀬晴行）

数多くの大会で優勝経験がある水野達雄さん。自宅にはトロフィーや盾が並ぶ―愛知県犬山市で